



東寺町の成立と変遷

都市の歴史景観・文化景観としての寺町



Establishment and Transition of
East Temple Area in Nagoya

名古屋文化遺産活用実行委員会
名古屋市蓬左文庫

はじめに

東区は名古屋城下町のなかでも、主に中級以上の武士層の屋敷が配された地域である。また武家屋敷のみでなく、藩主の別邸である「御下屋敷」や歴代藩主の菩提寺「建中寺」も存在するなど歴史資産が豊富なエリアである。さらに清須越で形作られた東寺町や多くの古刹精舎の存在も、大都会の都心部にありながらきわめて異彩をはなっている。

東寺町は約 40 の寺院が清須越で移転してきた。やがて街の開発とともに新たな寺院も増え、幕末期には今回地図で取り扱う範囲内に限定しても、70 ケ寺をこえる寺が営まれていた。現在では戦災での焼失や都市の再開発による移転などで減少したとはいえ、いまなお約 40 ケ寺がビルの谷間で営まれている。

現在、寺院は“寺離れ、に直面しているといわれる。戦災で本堂が消失し、境内は道路に接収され、墓は平和公園に移された。墓と寺の分離は檀家の減少に直結し、都心部で寺を維持するのは困難になりつつある。また日常的な建物の補修費用や後継者問題(住居問題)も切実であり、本堂の改修費用が工面できず、廃寺が相次ぐのではないかと危惧する関係者も多い。



こうした困難な時代だからこそ、清須越から 400 年以上の歴史をもつ寺町がかろうじて往時の雰囲気を残すうちに、その現状を記録して市民共有の文化的資産として、その価値を見いだし知らしめることが求められている。とはいえ各寺院には日々のお勤めがあり日常生活があり、個別のご事情もある。寺や仏像は信仰の対象で文化財ではない、というご意見もある。それぞれの事情も尊重しながら、東寺町とその周辺寺院の“いま、を記録し、過去の史料を見直して後世に残すことを、名古屋文化遺産活用実行委員会は目指している。

このレポートは文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化事業」の活動報告である。調査で作成した資料や聴き取りで得た新たな知見をまとめ、東寺町の変化をビジュアルでわかりやすく示すことを意図している。この報告書を契機に新たな「東寺町」研究が進展し、名古屋文化遺産の保存と活用が盛んになることを期待する。

平成 29 年 3 月

名古屋文化遺産活用実行委員会
名古屋市蓬左文庫

目 次

はじめに

目 次

平成 28 年度の実施報告	1
I 東寺町の概要	2
1. 東寺町の宗派別寺院配置図(幕末期)	3
2. 南寺町の清須越寺院(幕末期に存続の寺社のうち)	4
3. 南寺町の宗派別寺院配置図	5
II 東寺町の変遷	
1. 東寺町の特徴	6
2. 地図で見る東寺町の変遷	6
2-0. 東寺町の現況概略図	7
2-1. 慶長二十年(1615)頃… 清須越の完了期	8
2-2. 寛永元年(1624)頃… 城下の安定期	10
2-3. 慶安五年(1652)頃… 建中寺の創建後	12
2-4. 貞享二年(1685)頃… 御下屋敷の造営以後	14
2-5. 宝暦五年(1755)頃… 宗春ショックの後始末	16
2-6. 文化元年(1804)頃… 建中寺西側防火帯と御添地の開発	18
2-7. 文政七年(1824)頃… 寺社の安定期	20
2-8. 明治三年(1870)頃… 幕末最晩期	22
2-9. 明治二十年(1887)頃… 初の近代測量地図	24
III 東寺町から移転した寺院	26
IV 今年度調査の概要と調査報告	
1. 圓勝寺調査の成果	30
2. 調査概要	34
V 圓勝寺調査からみえる “もうひとつの清須越”	37

平成 28 年度の実施報告

1. ガイドツアーの実施

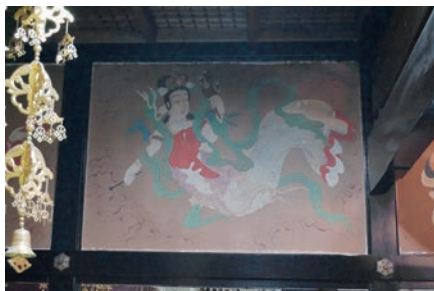
a. 東寺町のガイドツアー (2016/10/5 実施)

法華寺町と禅寺町に今も残る寺院を訪ねた。コース内では、浄土宗西蓮寺、日蓮宗法輪寺、同浄蓮寺の各寺院で、お庭や戦災を免れた建物など内部を見学した。

b. 東寺町のガイドツアー (2016/10/8 実施)

東寺町の北側で片端筋までの間に営まれている寺院をめぐった。

浄土宗貞祖院では御霊屋建築の本堂内部を見学した。臨済宗禅隆寺と浄土真宗本願寺派圓勝寺では、宗派による内陣の構造の違いなどを紹介した。これら文化遺産の公開はお寺の協力が得られたことで実施できた活動である。



2. 史料調査

昨年度に引き続き、圓勝寺の聴き取り調査と古文書・仏像などの調査をおこなった。その過程で、有力檀家の家から由緒書の写しが発見され、その分析から草創期の寺の歴史が明らかとなり、清須越で名古屋に移ってきた頃の事情が推測できることとなった。この成果はIVで資料とともに紹介する。東寺町の浄蓮寺で本堂内陣に描かれた天女像（迦陵頻伽）や禅隆寺の観音堂の天井画（二十四孝の彩画）の調査や、貞祖院では、建中寺から譲り受けた巨大な須弥壇と什器の調査を行った。調査はまだ緒についたばかりであり、今後も継続調査が必要である。

3. 調査資料の作成

ガイドツアーの参加者に参考資料を作成して配布した。さらに、今年度から旧名古屋市史の社寺編編纂の基礎となった「名古屋寺院誌」（鶴舞中央図書館所蔵）のデータベース化を開始した。寺社悉皆調査の基礎データとなる取り組みである。



4. 報告会の実施 (2016/9/22 実施)

お彼岸にあわせ、圓勝寺で門信徒の方々を中心に、圓勝寺の調査成果の報告会を開催した。内容は本書の中間報告であったが、清須越以来の歴史に関心は高かった。参加者は80名をこえた。

I. 東寺町の概要

“東寺町”は名古屋開府で形作られた町割のなかに、意図的に寺を集めた区画である。東海道宮宿に続く熱田道が名古屋城下に入る両側に広がる“南寺町”と同じように、東寺町も駿河街道をはさんで配置されていた。名古屋城下町の縄張（町づくりプラン）にも、敵の侵攻を防ぐ前線として寺町をおくという考えが根底にあったことはまちがいないだろう。その計画に添って、多くの寺院が“清須”とその周辺から移転してきた。

この東寺町は駿河街道と直交するように2本の街路が設けられていた。東側が「法華寺町通」、西側が「禅寺町通」である。寺は通りに面して山門を開いていた。西蓮寺と聖徳寺のみが、駿河道に向けて参道を開いていたようである。法華寺町と禅寺町の間は、その中央を流れる小川で背割りで寺域を接していた。水路は排水と寺域を分ける役割を果たしていた。余談になるが、法華寺町は明治になると「小川町」と改名されるが、この小川にちなんだ命名である。この東寺町はほぼすべてが江戸期をつうじて除地、つまり非課税地だった。多分当初から拝領地だったのであろう。清須越寺院のなかには藩主の転封にともない清須へ移転してきた寺院も多く、従属した家臣団が主な門信徒である。寺にとっても名古屋城下町で税がかからない広大な寺領を得る条件は悪い話ではなかった。

となると清須越の選抜条件や寺領地の分配基準などが疑問として浮上する。つまり清須越に選ばれた（応じた）寺と選ばれなかった（応じなかった）寺の違いや、寺領地の面積や配地などの意図である。たとえば浄土宗の西蓮寺、曹洞宗の含笑寺、日蓮宗の法華寺のような各宗派の触頭的な中核寺院が駿河街道沿いに寺領地を得たことは理解できるが、他の寺院の付与面積や割り当て基準などは今後とも検討が必要だろう。

さて“東寺町”とは厳密な地名ではない。南寺町に対する東に存在する寺町という意味の地域名でもある。開発当初は西蓮寺から本住寺の南側で、駿河街道の両側の二区画ずつの町名だったが、貞享二年（1685）に“南寺町”の門前町、裏門前町との混同を避けるため「東門前町」と改称されて、東寺町という名称は漠然とした地域名となる。つまり、いまわれわれが使っている東寺町は明確にエリアも条件も定まっているわけではない。基本的に清須越寺院の集合エリアに限定する場合と、それ以外の周辺寺院を含める場合もある。

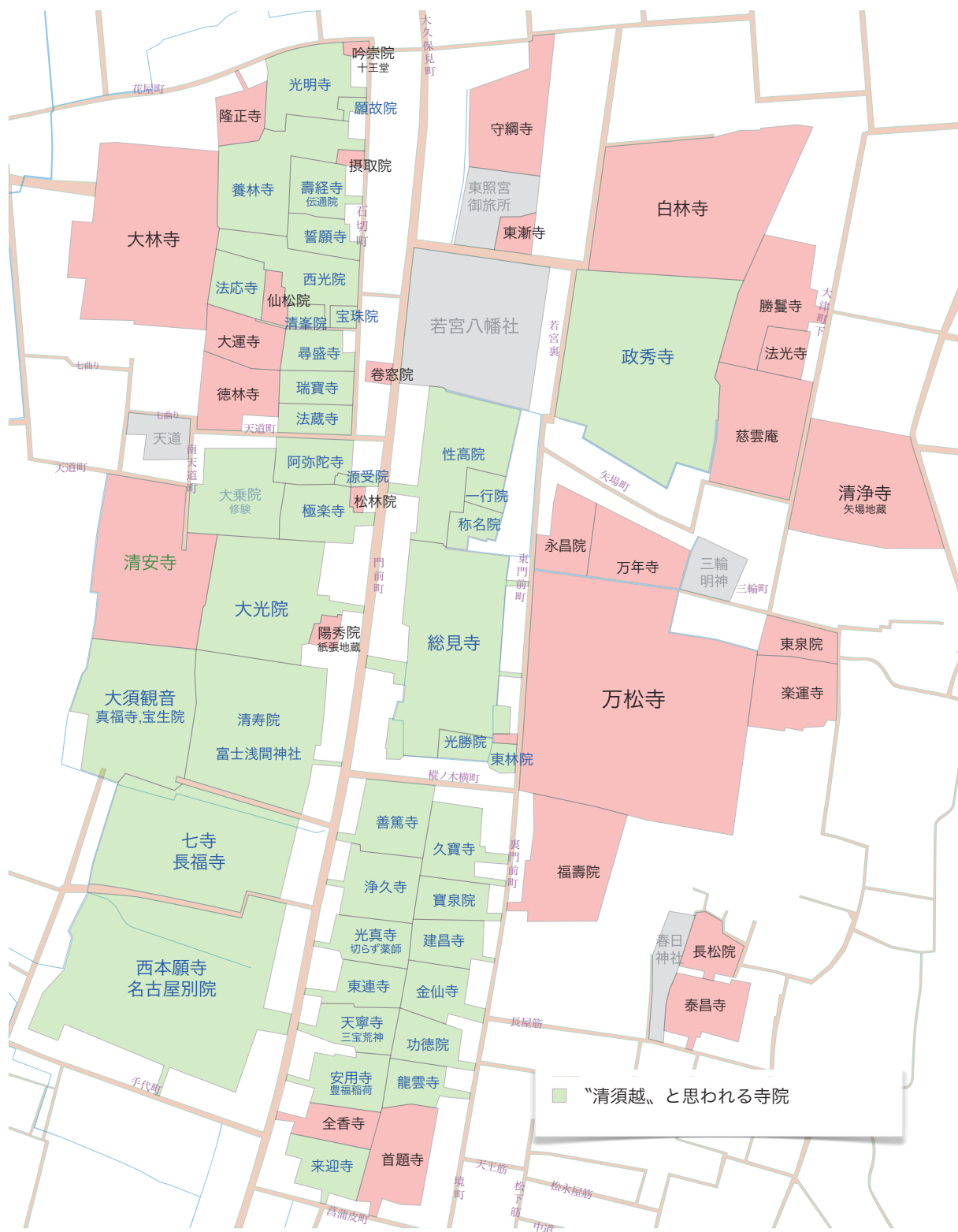
この報告書では、清須越の時期、法華寺町と禅寺町に面して計画配置された寺域に移転してきた寺院の集合を狭義の“東寺町”と規定する。その範囲は後述する「慶長二十年頃の東寺町周辺寺社配置図」の、北側の本立寺から南の千葉寺までの寺院群と考えたい。すなわち、その時点では移転していない蓮勝寺や本住寺は含めるが、光照院唯願寺や妙蓮寺などは除外したい。また同図の北側に点在する寺社を、“東寺町北”的なひとつのグループと想定しておく。いずれにせよ、この地図上に掲載した寺社を厳密に規定したものはなく、常に“東寺町”としての曖昧さを内包している。

I - 1. 東寺町の宗派別社寺配置図（幕末期）



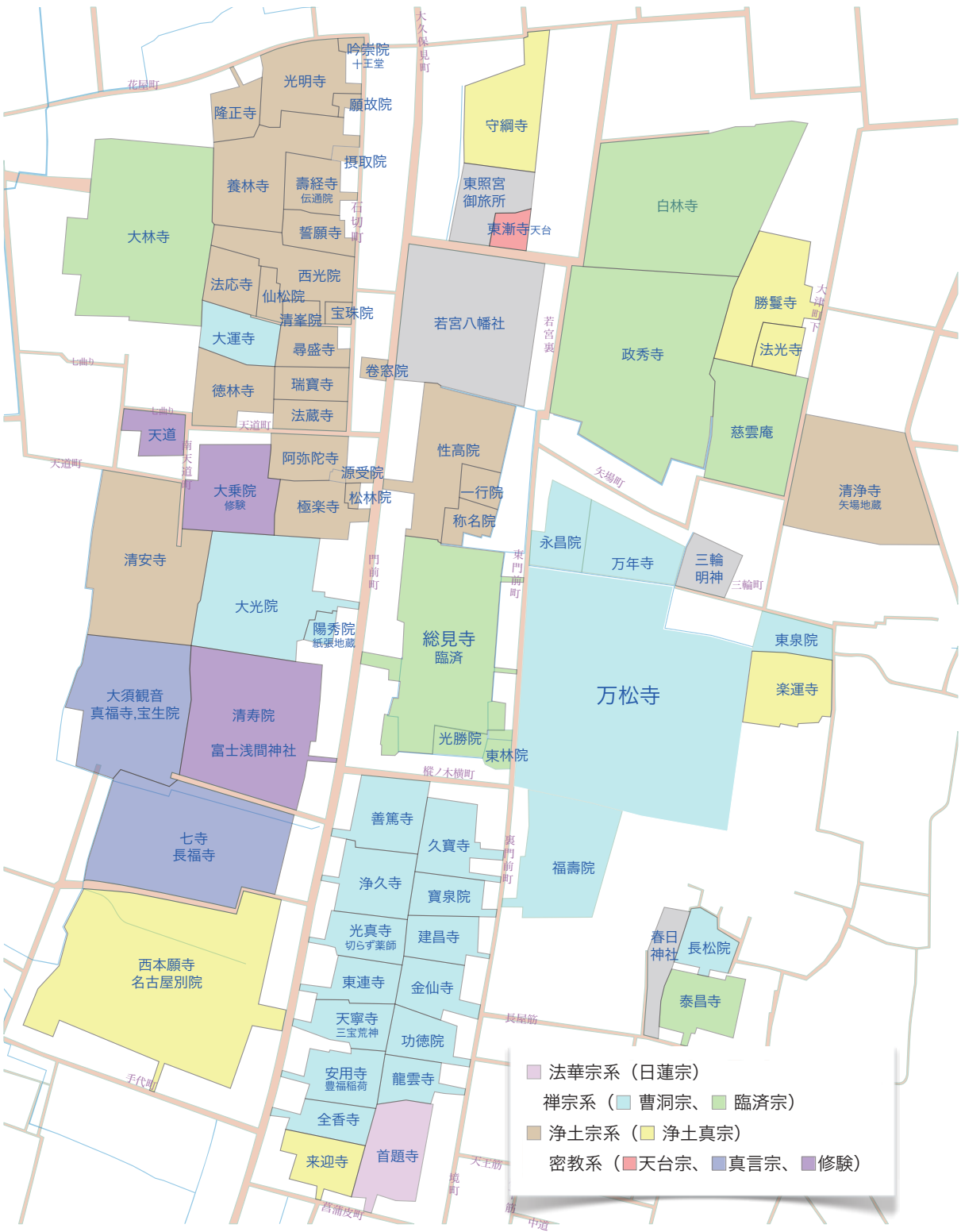
幕末期の東寺町とその周辺寺院の状況である。寺号の変化はあっても多くの寺がこの地に存続した。明治初期の廃仏毀釈も乗り越え、明治・大正期を通じて廃寺も少ない。

I - 2. 南寺町の清須越寺院（幕末期に存続の寺社のうち）



“南寺町”の清須越の様子をしめす地図である。■色が“清須越”とされる寺院で、慶長20年頃までには移転している。■色の寺院は在地、または後の移転・創建。門前町（熱田道）の両側の寺院配置がよくわかる。

I - 3. 南寺町の宗派別社寺配置図



■浄土宗と■曹洞宗は同一エリアに集中している。同じ宗派はまとめて配置されたことがわかる。一方清須越の日蓮宗寺院は皆無で（首題寺は貞享三年建立）、法華系寺院は東寺町に集める意図があったことが明確である。

II. 東寺町の変遷

1. 東寺町の特徴

東寺町を特色づける要素は、特定の宗派をひとつの通りに集めて配置されていることにある。とはいえこうした要素は南寺町をはじめ、普遍的に見られることで特別なことではない。東寺町の特徴のひとつは筋ごとに異なる宗派が配置されていることにある。さらに法華寺町筋は路の両側に、駿河街道の北側だけでも 16 ヶ寺の法華宗系寺院が集中して配置されていることが最大の特徴といえよう。一方西の禅寺町筋では、道の東側には駿河街道を挟んで 10 ヶ寺の曹洞宗寺院が、西側には 4 ヶ寺の浄土宗寺院が配置されている。宗派ごとにきわめて整然と配置された印象を与えている。

その最大の特徴といえるのは、法華宗系（日蓮宗）寺院が集中している点にある。南寺町において清須越の同宗派が皆無なこと（前頁参照）をあわせて考えると、徳川家の宗派支配の意向と各宗派の関わり方を考える手がかりとなりそうである。さて、東寺町の寺院にもさまざまな変遷がある。現在その変遷をたどる最良の研究書は「名古屋市史 社寺編」である。この「社寺編」は昭和初期に編纂されたもので、幕末維新期の寺社の動静を知るにはこれに優る研究書はない。とはいえ、ほぼ一世紀前の出版であり、昭和前期の変遷や戦災後の変化には対応していないことや、個別の寺院の来歴が中心で、エリアや宗派の動静が反映されていないことが残念でもある。

そこで東寺町の周辺地域で、エリアとしての寺院変遷をたどり、現在にいたる「社寺編」以降の歴史をたどるのがこのレポートの主旨である。この報告書を契機として、新しい興味を喚起できればと考えている。

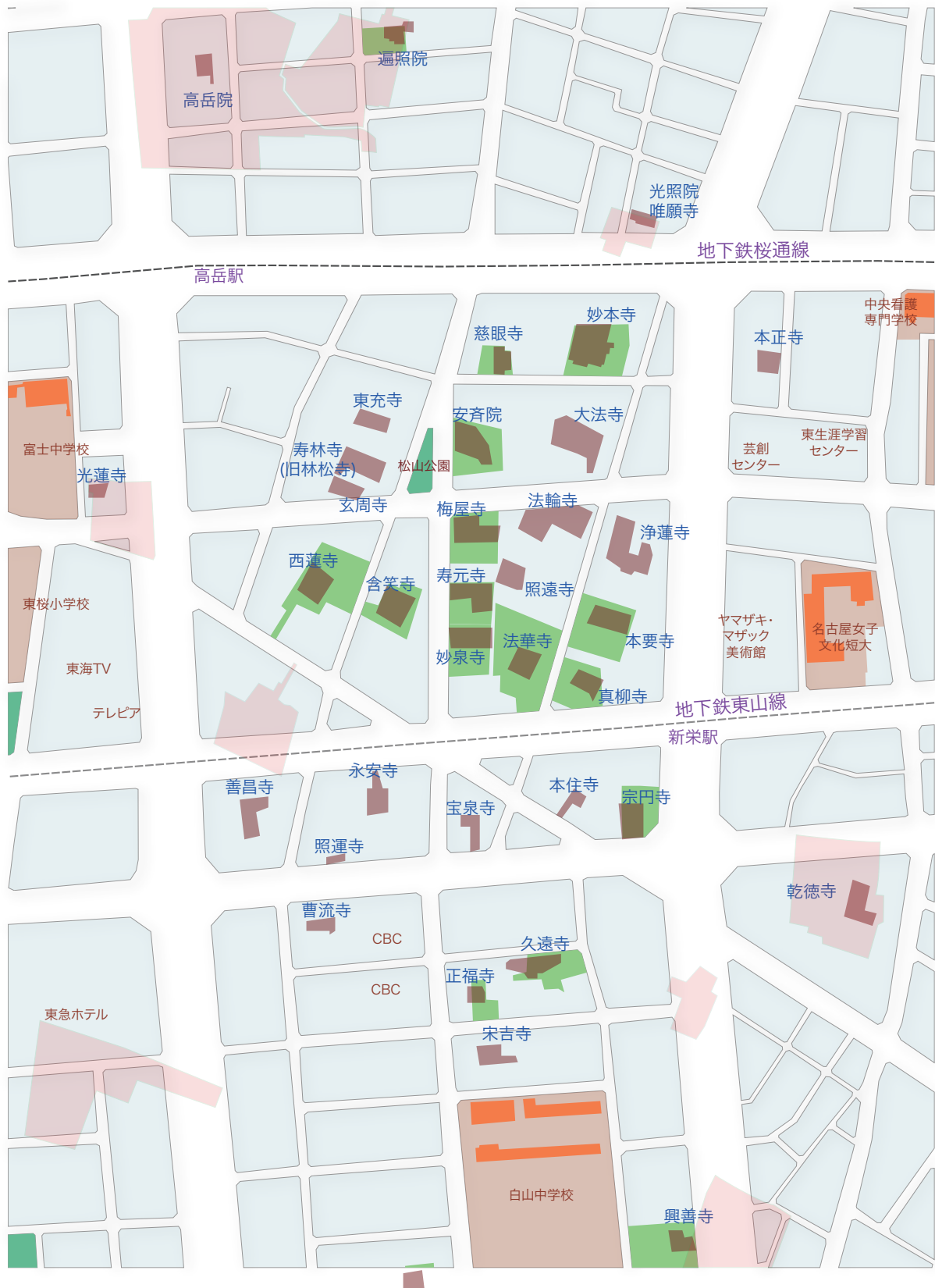
2. 地図で見る東寺町の変遷

調査研究の成果は主にビジュアルな地図のかたちで提示する。まずは寺社の変遷や街路の拡張などを押さえておく必要がある。あくまでも各時期の“想定地図”ではあるが、その変遷を裏付ける史料を反映することで、直感的に理解していただけるものと確信している。作製する地域図は 9 時期 9 枚。目的とする年代に最も近い絵図を参照した。基本はその絵図を正確に描写したが、明確な錯誤や書き落としなどは補填した。

基本的に絵図である以上、錯誤や書き落としは存在するという前提だが、ある年代にない事柄は絶対に描かれない。もし描かれているとすれば、後補か贋作を疑うことになる。一方、たとえば塔頭などは描かれないことも多いが、史料として存続が確認されれば採用する。さらに変遷する寺域（範囲や面積）などは前後の絵図情報から推測せざるをえないことが多く、正確とはいえないこともご承知おきいただきたい。

2-0. 東寺町の現況概略図

国土地理院の「数値地図」を元にしたため、すべての寺社が反映されているわけではない。



現在旧東寺町エリアで29ヶ寺がほぼ旧地またはその近くで存続している。法華寺町通、禅寺町通を東西に横切る幹線道路によって、山門の向きが変わった寺院も多い。

2-1. 慶長二十年(元和元年 1615)頃

いうまでもなく慶長二十年の城下町を描いた絵図はない。そこで名古屋城下図として最も古く、かつ町の基本的構成が明確な「名古屋城絵図 正保四年(1647)写」を用いた。水路は後の時代のものを流用。寺社地の形状などは推定。慶安五年までの3図は、初期の寺社の変遷を示すための仮の想定図である

◆ 地図の★印を付した寺院は、ほぼ慶長十四年～二十年に“清須、から移転した寺社。

東寺町の清須越寺社

- ◆ 本立寺 日蓮宗 京都本国寺末
- ◆ 本正寺 日蓮宗 京都本国寺末
- ◆ 長照寺 日蓮宗 京都本国寺末 > 寿元寺
- ◆ 妙泉寺 日蓮宗 京都本国寺末
- ◇ 本成寺 日蓮宗 京都本国寺末
- ◆ 妙源寺 日蓮宗 京都本国寺末 > 浄蓮寺
- ◆ 本要寺 日蓮宗 京都本国寺末
- ◇ 真柳寺 日蓮宗 法華寺末 慶長中開基*
- ◆ 蓮華寺 日蓮宗 京都妙顕寺末
- ◆ 妙本寺 法華宗 越後本成寺末
- ◆ 大法寺 日蓮宗 京都本国寺末
- ◆ 妙国寺 日蓮宗 京都妙顕寺末 > 法輪寺
- ◆ 妙長寺 日蓮宗 京都本国寺末 > 照遠寺
- ◆ 法華寺 日蓮宗 京都本国寺末
- ◆ 聚福院 曹洞宗 含笑寺末
- ◆ 慈眼院 曹洞宗 含笑寺末
- ◆ 就梅院 曹洞宗 含笑寺末
- ◆ 安斎院 曹洞宗 含笑寺末
- ◆ 梅屋寺 曹洞宗 含笑寺末
- ◆ 含笑寺 曹洞宗 万松寺末
- ◆ 玄周寺 浄土宗鎮西派 白川養林寺末
- ◆ 東充寺 浄土宗西山派 栗生光明寺末
- ◆ 林松寺 浄土宗鎮西派 性高院末 > 寿林寺
- ◆ 西蓮寺 浄土宗鎮西派 京都知恩院末
- ◆ 長全寺 曹洞宗 含笑寺末
- ◆ 泰増寺 曹洞宗 永安寺末
- ◆ 賢隆寺 真宗高田派 一身田専修寺末 > 久遠寺
- ◆ 正福寺 曹洞宗 永安寺末
- ◆ 宋吉寺 曹洞宗 梅川長栄寺末

- ◆ 宝泉寺 天台宗 野田密蔵院末
- ◆ 常德寺 顕本法華宗 京都妙満寺末
- ◆ 松徳院 曹洞宗 梅川長栄寺末
- ◆ 千葉寺 天台宗 野田密蔵院末
- ◆ 永安寺 曹洞宗 三ツ淵正眼寺末
- ◆ 照運寺 曹洞宗 永安寺末
- ◆ 曹流寺 曹洞宗 永安寺末
- ◆ 善久寺 曹洞宗 梅川長栄寺末 > 広徳寺
- ◆ 聖徳寺 真宗大谷派

周辺域の清須越寺社

- ◆ 高岳院 浄土宗鎮西派 京都知恩院末
- ◆ 助正院 浄土宗鎮西派 高岳院塔頭
- ◆ 善光寺 浄土宗鎮西派
- ◆ 養蓮寺 浄土宗鎮西派
- ◆ 普蔵寺 曹洞宗 万松寺末寺
- ◆ 正覚寺 曹洞宗 万松寺末寺 > 威音院
- ◇ 専修坊 浄土真宗本願寺派 > 東漸寺
- ◆ 大光寺 日蓮宗 身延山久遠寺末
- ◆ 貞祖院 浄土宗鎮西派
- ◆ 圓勝寺 浄土真宗本願寺派
- ◆ 法蔵寺 浄土宗鎮西派 建中寺末 > 平田院
- ◆ 玄海寺 天台宗 野田密蔵院末 > 圓教寺

清須越ではない在地寺社

以下は清須越以前に名古屋周辺に所在したか、その可能性が高い寺社。

- ◆ 養念寺 真宗大谷派
- ◆ 室寺観音院 浄土宗鎮西派 京都知恩院末
- ◆ 松山神社
- ◆ 富士塚権現旧地
- ◆ 白山神社

* 真柳寺は清須越ではなく、この時期に法華寺の末寺として創建された可能性が高い。

* 本成寺は明確な移転時期が判明しないが、清須越と推測される。

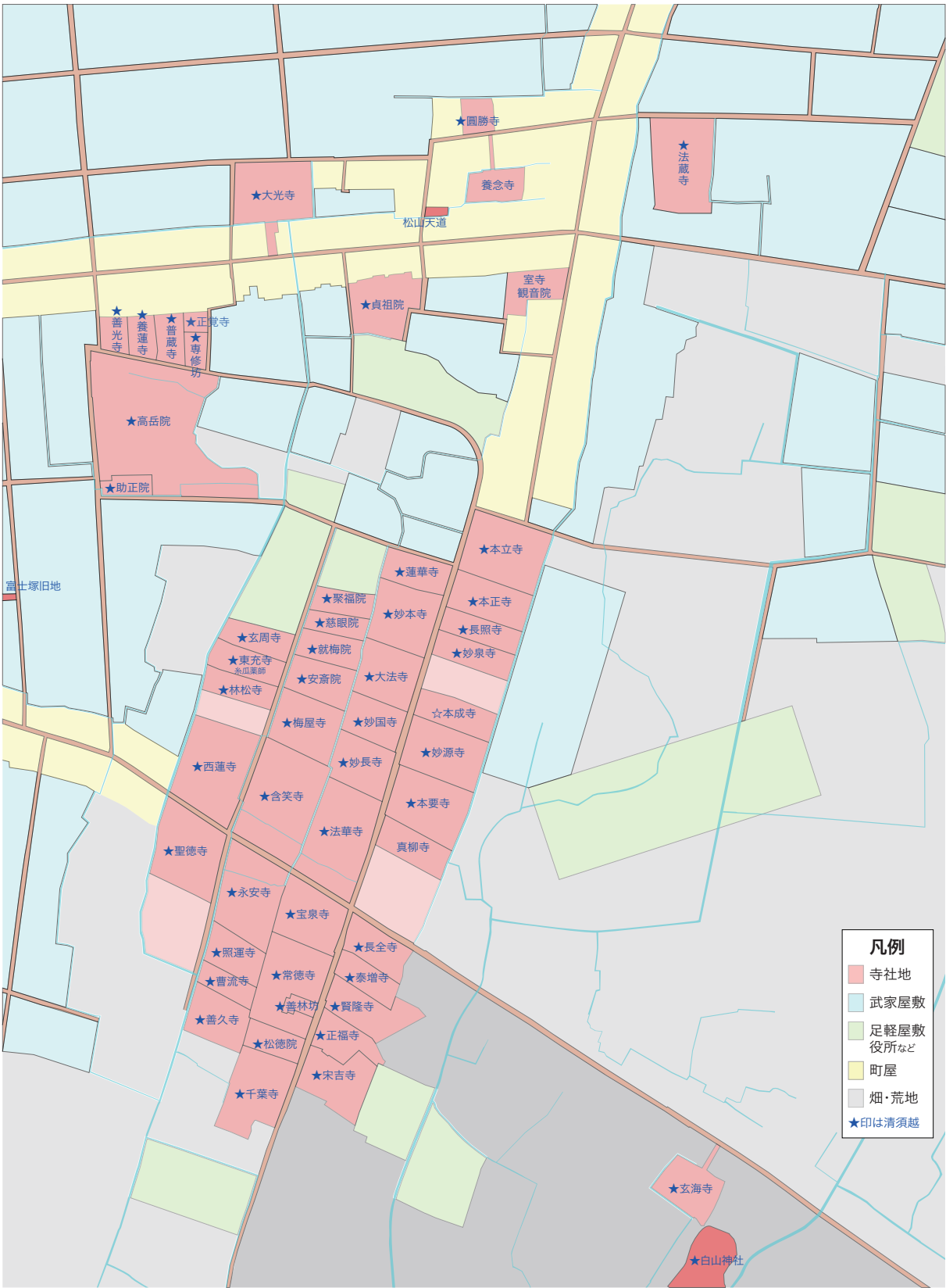
* ◇は明確な移転時期が不明な寺社だが、総合的に判断して“清須越、と判断した。

* この図には、西蓮寺などの駿河街道沿いの地子や町屋が描かれていない。書き落としか事実かは要検討。

* 後に寺号が変わった寺院は「>」の右に記した。

慶長二十年(1615)頃の東寺町周辺寺社配置図

清須越の完了期



この図の道路や寺社・屋敷配置等は、徳川美術館蔵「名古屋城絵図 正保四年写」図691を参照して作図した。

2-2. 寛永元年(1624)頃

この図幅は慶長二十年と同様、「名古屋城絵図 正保四年(1647)写」を用いた想定図である。基本的に寺社の変遷を示すもので、町家・武家地などの正確さには重きを置いていない。

なお、とくに典拠を記していないものは【名古屋市史 社寺編】(大正4年)によっている。

◇ 専修坊 浄土真宗本願寺派 > 東漸寺

※正確な移転時期不明ゆえ清須越とした。

「慶長十二年、清須に移り、其後此地に移る」「旧甲州府中に在て専修坊と号す、後清須に遷り、慶長十二末年撞木町へ移転して、後此地に遷れり【府城志】」

◆ 蓮勝寺 日蓮宗 京都本国寺末

「元和四年(1618)、森住院日勝の開基なり〔清須より移転とも〕」

◆ 禅流寺 臨済宗 妙心寺末 > 禅隆寺

「元和九年(1623)、元山甫隠、藩祖義直より寺地を拝領して建立す」

◆ 円明寺 真宗大谷派

※元和七年(1621)移転説と、寛文年中移転説の双方あり。

「元和七年(1621)〈市譜に寛文年中となす〉、五世順智の時、今の地に移り、」其後遙星霜押移りて、寛文年中此地にうつる 云々【金鱗九十九之塵】」

「寛文年中、当所へ引き移り、【名陽図会】」

「府志曰、在九十軒陌、一向宗東派直参。元在勢州長嶋、元和七年移于今地 府尹志に、此寺旧勢州長嶋松ヶ崎村に有、文明年中草創、寛文年中爰に移るとなり、【府城志】」

◆ 念宗寺 浄土宗鎮西派 > 遍照院

※開山の本蓮社願誉念宗が元和七年(1621)寂なので、元和の初期には建立か？

「青山弥次兵衛春勝〈遍照院殿光誉摂取と号す〉、藩祖義直に請ひ、此地を給はりて建立し、本蓮社

願誉念宗を以て開山とす。初め念宗寺と号せしを、」元和七辛酉年(1621)、青山弥次兵衛春勝請此地 於前垂相源敬公創建之【府城志】」

◆ 浄峯院 浄土宗鎮西派 高岳院塔頭

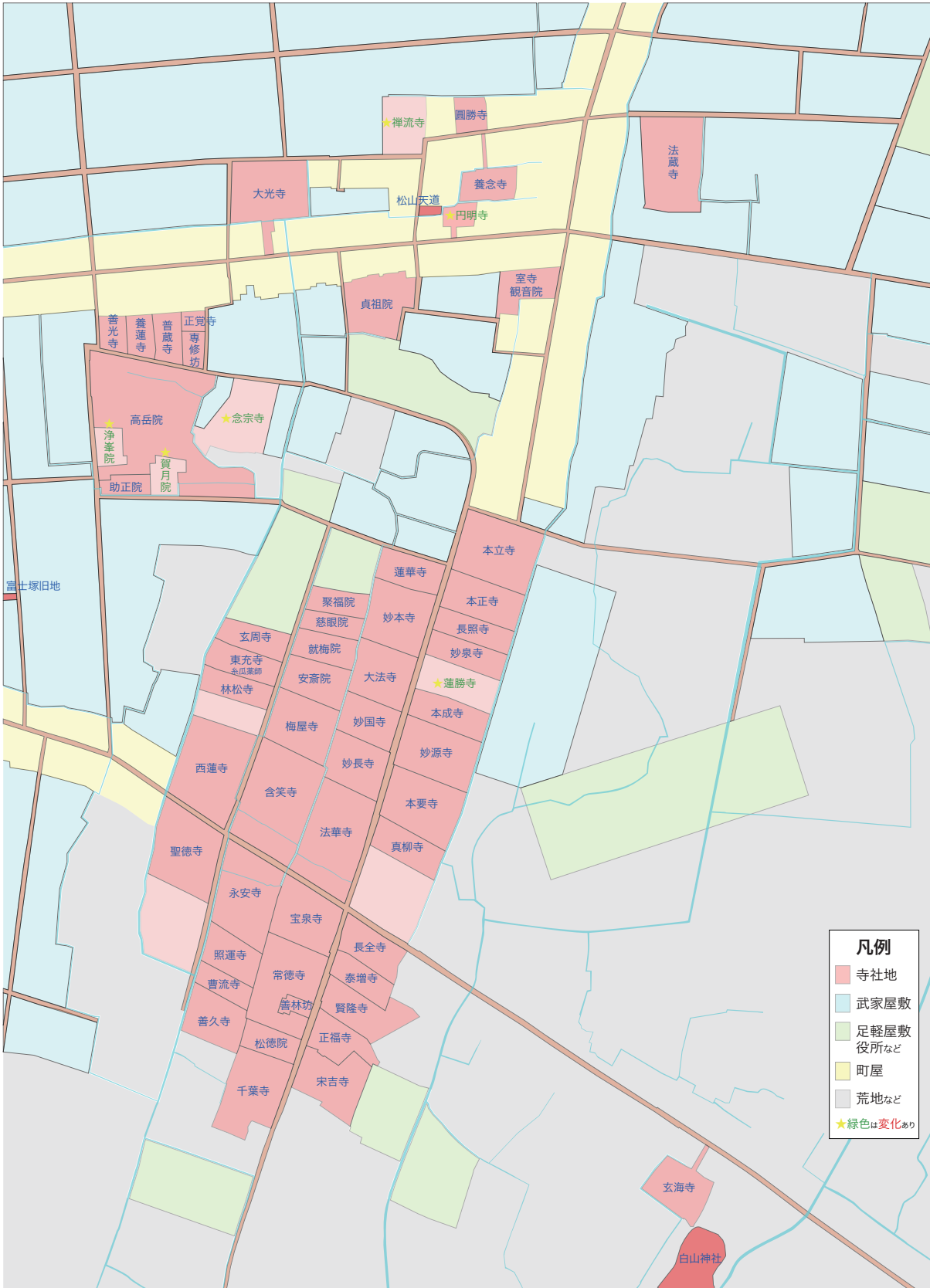
「元和三年(1617)、相応院夫人、先考志水加賀守武雄の為に建立す」

◆ 賀月院 浄土宗鎮西派 高岳院塔頭

「元和三年、相応院夫人、先妣龍雲院賀月妙慶の為に建立す」

寛永元年(1624)頃の東寺町周辺寺社配置図

城下町の安定期



この図の道路や寺社・屋敷配置等は、徳川美術館蔵「名古屋城絵図 正保四年写」を参照して作図した。

2-3. 慶安五年(1652)頃

参照地図は正保四年(1647)写で、建中寺の創建にともなう周辺(道路環境)が大きく変化しているはずだが、正確には反映していない。

◆ 建中寺 浄土宗鎮西派 京都知恩院末

「慶安四年(1651)、藩主光友、藩祖義直の為に経始し、五年二月、大殿、方丈、鐘楼、山門、書院、庫裏等を落慶す」

◆ 玄周寺 浄土宗鎮西派 白川養林寺末

「慶長遷府の際、後の大永軒の地に移り、寛永年中、今の地に移る」

◆ 大永軒 曹洞宗

「此地初めは浄土宗養林寺の末寺玄周寺の旧地として、其控なりしが、玄周寺が養林寺の末寺と定まりし時、養林寺の控に帰し、養林寺は此地の替地として、養林寺裏の明地を拝領せり。含笑寺第四世太巖秀徹<明暦二年六月二十一日寂す>隠居所とせんとして、成瀬正虎を以て藩祖義直に請はしめ、寛永十七年(1640)、之を拝領す。後同寺第十五世重潭大年、再営して退隠す」

◆ 本住寺 日蓮宗 池上本門寺末

「寛永六年(1629)、四世性法院日年の代、今の地に移る」

◆ 瑞雲寺 臨済宗妙心寺派 矢場政秀寺末 >善昌寺

「寛永五年(1628)七月、槐山宗三、藩祖義直より寺地を拝領し、一寺を建立して瑞雲寺と号せしが、寛永十七年十二月、織田左衛門佐信盛を開基となし、二世松月宗怡之を中興す」

◆ 唯願寺 浄土宗鎮西派 京都智恩院末

「明蓮社光誉浄阿称入 <正保三年八月十日寂、墓あり>建立す」

「府尹志に、此寺清須より遷れり、常題目筋北側にあり、【府城志】」

「正保三年(1646)、当寺建立のみぎり、開山照入<しょうにゅう>和尚もとは天台宗の僧なりければ、

つてをもとめてかの山よりこひうけ当寺の本尊とす。【名陽図会】」

◆ 教順寺 浄土真宗本願寺派

「寛永九年(1632)、今の地<この地もとは修験大福院弁天宮社の地なりき>に移る。【市史社寺編】」

「府志曰、新陌に在、一向宗西派直参、元在甲州巨麻郡府下、慶長十二丁未年移于清須、元和年中又遷今地」「府尹志に、此地初修験大福院有、後其院松山天道へ遷る、寛永九申年片端道東坂下より此に移れり、此寺鈴木山と号す【那古野府城志】」

◆ 光蓮寺 真宗大谷派

「慶安二年(1649)五月、十七世慈徳久元、今の地<此地一部は稲垣正兵衛より、一部は其地の芙蓉峯庵と共に、富士権現本寺仏庵主より買ひ求む>に移る」

◆ 法導寺 顕本法華宗 妙満寺末

「もと長者町の下に在り。寛永十九年(1642)、今の地に移る」

◆ 聖徳寺 真宗大谷派

「前略<移転の後も草庵及び墓地あり。当寺の控地となる>に移り、寛永十五年(1638)の頃、松本町<後富沢町と改む。即ち今の地>に移る」

※つまり扣地になった。

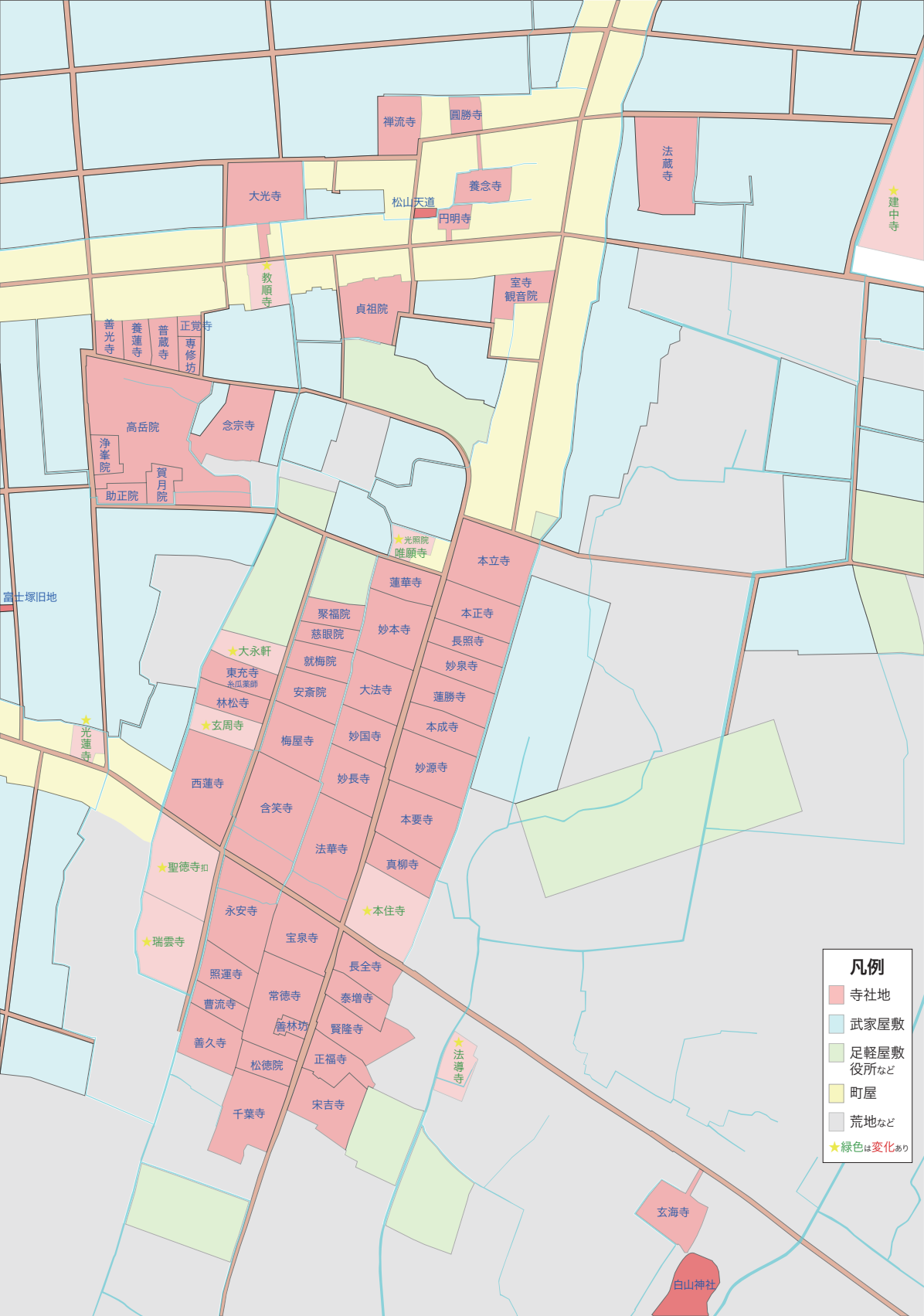
◇ 宗円寺門前

「慶安四年(1651)八月、町家と為す。<市譜>」

※寺は万治中(1658~60)の移転とされる。

慶安五年(1652)頃の東寺町周辺寺社配置図

建中寺の創建後



この図の道路や寺社・屋敷配置等は、徳川美術館蔵「名古屋城絵図 正保四年写」を参照して作図した。

2-4. 貞享二年(1685)頃

参照地図は徳川美術館蔵「名古屋城下絵図 図692」を用いた。これは御下屋敷の造営から 15 年ほど後に描かれたもので、周辺の整備状況がよくわかる。

◇ 御下屋敷

「東区葵町一体の地域なりき。延宝七年(1679)、藩主光友之を築く【市史地理編】」

◆ 妙源寺 >> 浄蓮寺 日蓮宗

「承応三年(1654)九月、住僧覚樹院日順磔刑に処せらる。由りて今の寺号に改む」

◆ 妙長寺 >> 照遠寺 日蓮宗

「承応三年(1654)九月、住僧日善磔刑に処せられ、由りて今の名に改む」

◆ 乾徳寺 曹洞宗 含笑寺末

「万治二年(1659)、成瀬正虎、其分家成瀬伊豆守之成が菩提の為に一字を此地に建立し、北岩秀南に与へて住せしむ」延宝四辰年(1676)、乾徳寺と改号【府城志】

◆ 宗圓寺 浄土真宗本願寺派

「万治中(1658-60)、今の地に移りて本山直末となる」

◇「宗円寺門前は慶安四年(1651)八月、町家と為す<市譜>」※矛盾あり

◆ 浄圓寺 真宗大谷派 > 大圓寺

「万治三年(1660)正月十四日の大火に罹りて、悉く焼失して、今の地に移る」

◆ 法蔵寺 >> 平田院 浄土宗鎮西派

「寛文三年(1663)浄土宗に改め、平田院と号し、建中寺の末寺となる」

◇ 蓮華寺地子

「地子は寛文三年(1663)卯四月町屋となれり、【府城志】」

◆ (日淳庵) > 妙蓮寺 日蓮宗

「寛文五年(1665)、小堂、番神堂、鐘楼を建て、普峯院殿の帰嚮を受けて寺地を拝領し、日淳庵と号す。寛文十三年九月、誕生寺と共に請ひて、小湊妙蓮寺と両所一寺となり」

◆ 専修坊 >> 東漸寺 浄土真宗本願寺派

「延宝三卯年(1675)、東漸寺と改号す【府城志】」

◆ 法輪寺 日蓮宗 > 重正寺

「延宝六年(1678)、名古屋駿河町に移り、延享五年、今の名【重正寺】に改む」

◆ 妙国寺 >> 法輪寺 日蓮宗

「承応三年(1654) <編年大略は二年に作る> 九月、住僧日命磔刑に処せらる。延宝七年(1679) 十月、今の寺号に改む」

◆ 念宗寺 >> 遍照院 浄土宗鎮西派

「延宝八年(1680)八月十五日、今の名に改む」

◆ 證誠寺 浄土宗鎮西派 建中寺末

「延宝八年(1680)五月十二日、近蓮社縁誉山頂、寺地を購求して、今の地に重建し、建中寺の末寺として、今の名に改む」

◇「證誠寺門前は延宝八年(1680)に町家と為す<市譜>」

◆ 明昌院 真言宗 醍醐三寶院末 > 一乗院

「もと明昌院と号す。天和三年(1683)三月、明昌院正永の開基なり」

◆ 玄海寺 >> 圓教寺 天台宗

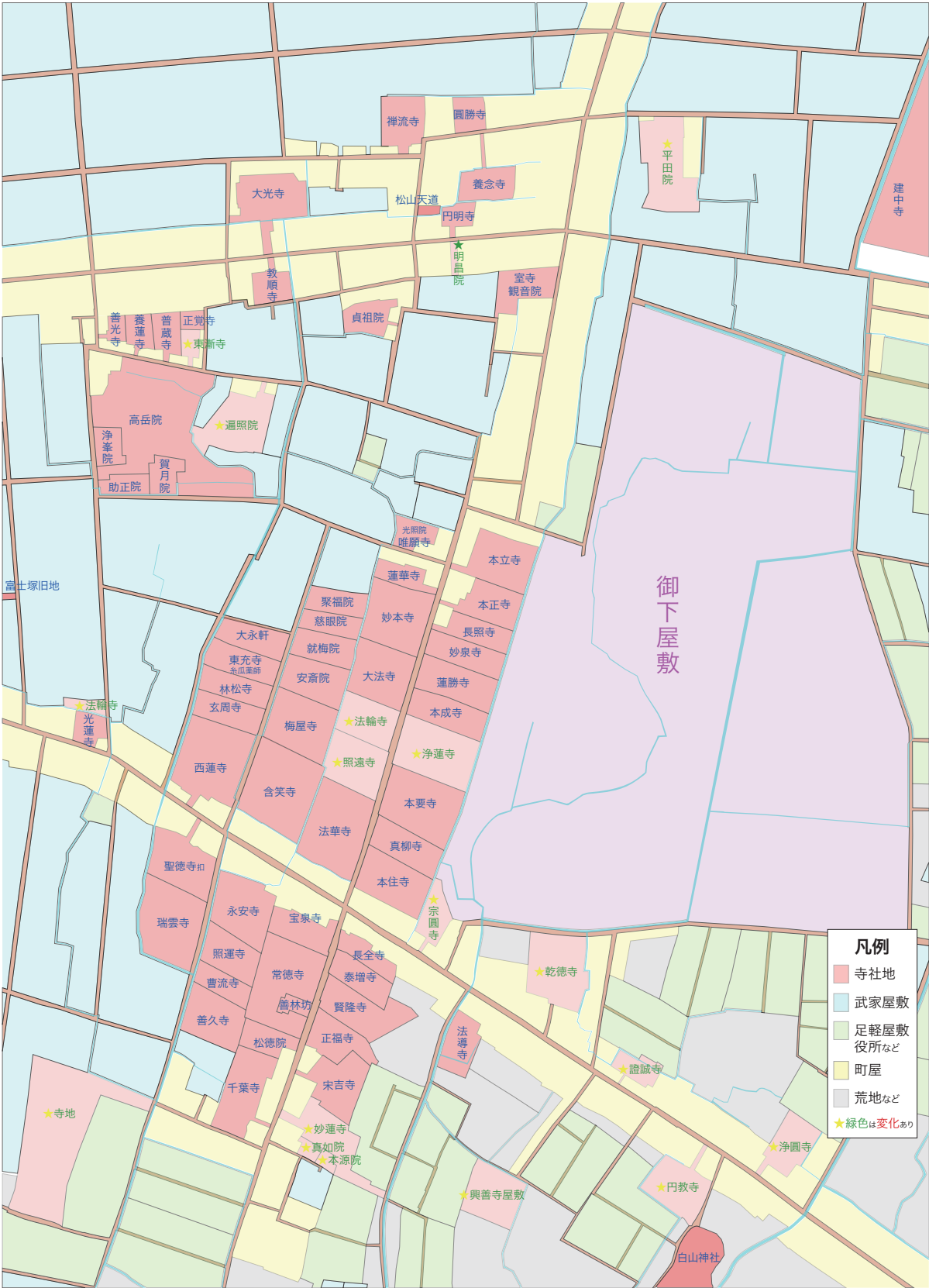
「初め白山玄海寺と号せしが、貞享二年(1685)、今の名に改む」

◇ 興善寺屋敷 浄土真宗本願寺派

「…清須に移り、慶長十五年、名古屋淀町に移る。 <中略> 明治三十五年、再び今の地に移る」
※つまり江戸時代の寺は淀町にあり、この地は寺屋敷だった。

貞享二年(1685)頃の東寺町周辺寺社配置図

御下屋敷の造営以後



この図の道路や寺社・屋敷配置等は、徳川美術館蔵「名古屋城下絵図」図692を参照して作図した。

2-5. 宝暦五年(1755)頃

参照地図は徳川美術館蔵「名古屋並熱田絵図」を用いている。さらに少し後の時代になるが、蓬左文庫蔵「尾州名古屋御城下之図 図 969」も併せて参照した。

◇「貞享二丑(1685)十一月十日、大塩、堀田方へ仕懸け、於座敷意恨を述べ打果たし野呂茂左衛門方へ立退く。大塩ハ今の屋敷、其時迄向側にも侍屋敷一軒アリ。其後孫左衛門罷在、又茂太夫と相果申候。此已後右屋敷潰レ、町家と成ル【紅葉集】」
※大光寺の北側で坂下筋が片端筋にでる北西側の広い町家。二度の殺傷事件が起きたので揚屋となる。ちなみに二度の事件に関わった大塩は東向。

◆ 善林坊 >> 慈雲院 顕本法華宗 常德寺塔頭
「慶長九年、僧清運建立して善林坊といひしを、元禄四年(1691)、慈雲院と改名す。明治四十一年に本寺に併合す【市史 社寺編 常德寺】」

◆ 長照寺 >> 寿元寺 日蓮宗 本国寺末
「元禄七年(1694)二月、今の名に改む」

◆ 長栄寺 本門法華宗 京都本能寺末
「元禄十二年(1699) <一に宝永三年となし、又は正徳三年となす>、今の地に移る」

◆ 宝林寺 臨済宗 妙心寺末
「宝永七年(1710)、今の地に移す」

◆ 浄圓寺 >> 大圓寺 真宗大谷派
「享保三年(1718)七月九日、寺号を大圓寺と改む」

◆ 富士浅間
「享保二十年(1735)、津田喜蔵、此地【富士塚町の旧趾】を拝領し、其北の一部を劃して社地となし、寛政十二年新に表門を建つ」

◆ 正覚寺 曹洞宗 万松寺末 > 威音院
「寛保元年(1741) <尾張名陽図会には元文の晩年に作る>、今の地に移る」

「初正覚寺と称す、寛保元酉年(1741)、鍋屋町裡より爰に遷、明和三戌年(1766)今の号に故、東側に在」
「同町【鍋屋町】裏 ▲小桜町円通寺持借屋是は元威音院の旧墟也、延享四卯(1747)借屋を造立せり【那古野府城志】」

◆ 善久寺 >> 広徳寺 曹洞宗 梅川長栄寺末
「寛保三年(1743)六月十九日、今の寺号に改む」
「地子は享保十巳年(1725)、宝暦五亥年(1755)、両度に町屋を造立せり【那古野府城志】」

◆ 法輪寺 >> 重正寺 日蓮宗 妙蓮寺末
「延享五年(1748)五月、今の名に改む」

◇ 大永軒地子
「享保八年(1723)十月、町家とせり」

◇ 妙泉寺門前
「享保十年(1725)十月、町家とせり」

◇ 妙本寺門前
「享保十年(1725)二月、町家とせり」

◇ 普蔵寺門前
「鍋屋町裏東への町つゞき。享保二十年(1735)十一月、町家とせり」

◇ 正福寺門前
「元文四年(1739)、町家とせり」

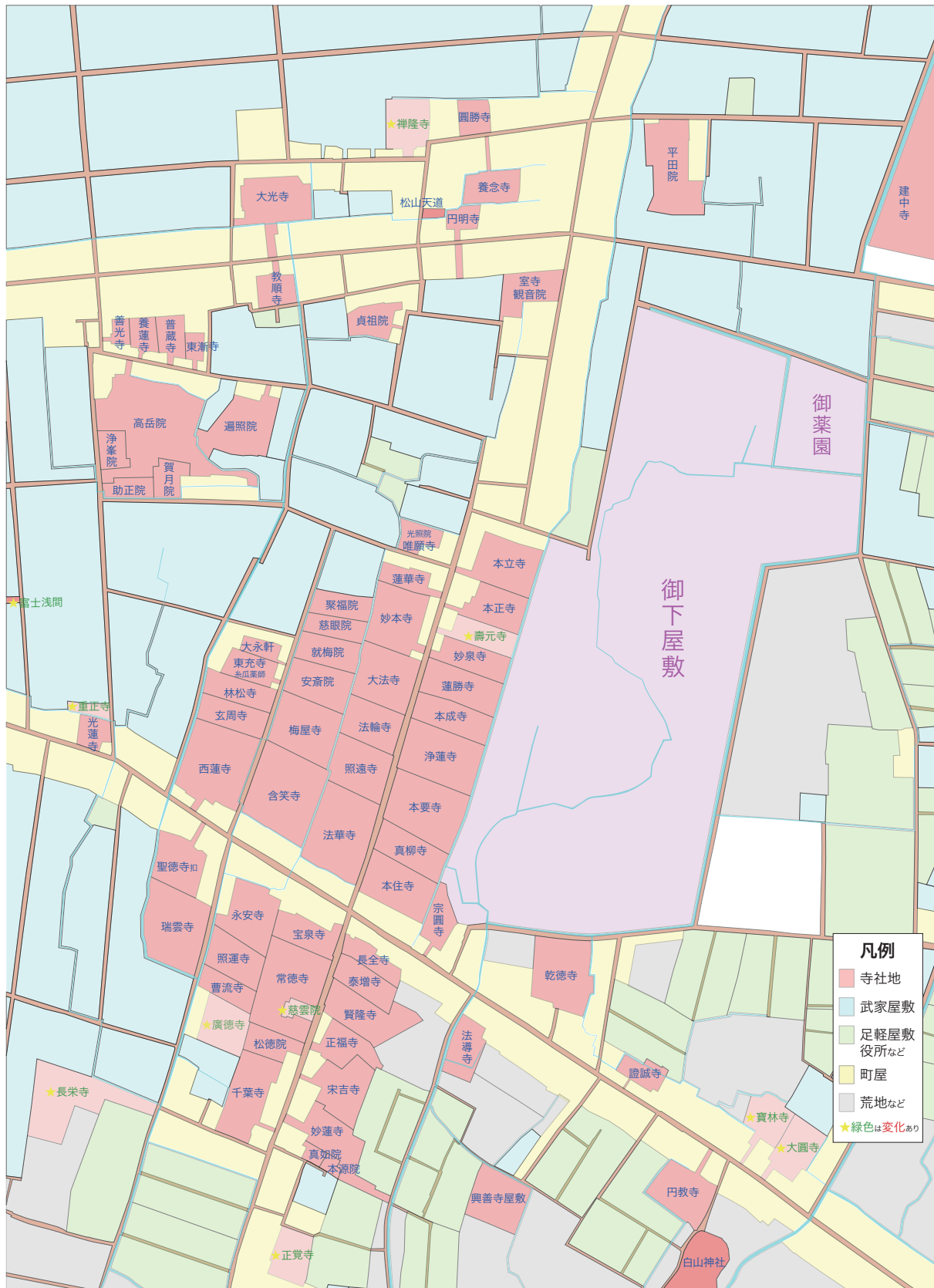
◇ 妙蓮寺門前
「寛保元年(1741)より追々に町家とし、」

◇ 圓通寺地子
「東漸寺門前の東より北へ曲れる西側なり。延享四年(1747)、町家とせり」
【正覚寺(威音院)が法華寺町南に移った跡地のこと】
以上、地子の開発年代は【尾張志】による。

◇ 東充寺地子
「寛延四年(1751)」

宝暦五年(1755)頃の東寺町周辺寺社配置図

宗春ショックの後始末



この図の道路や寺社・屋敷配置等は、徳川美術館蔵「名古屋并熱田絵図」図695を参照して作図した。

2-6. 文化元年(1804)頃

参照地図は名古屋市博物館蔵「名古屋御城下絵図 501-82」を用いている。

◇ 聚福院門前

「聚福院門前は明和六年(1769)正月、町家とせり」

◇ 久遠寺門前

「久遠寺門前は寛政五年(1793)五月、町家とせり」

◆ 賢隆寺 >> 久遠寺 真宗高田派 一身田専修寺末

「宝暦十一年(1761)九月四日、今の寺号に改む」

◇「【天明五年(1785)】正月廿三日、午前十一時頃、清水八王子前より出火、西北風強くして、火東方へ延び、久国寺、長久寺を焼き、長塀町筋に出で、赤塚町、鐵砲塚町を撞木町角まで下り、平田町を経て建中寺に移り、僅に山門、表門を残して、藩主歴代の霊屋、本堂、庫裏、鐘樓等殆ど全焼し、夫より東は車道を越えて、自然院、情妙寺、鐵砲矢場に至り、南は代官町、水筒先町に至り、午後四時頃に鎮火す。【市史_政治編Ⅱ】」

※この後、建中寺西側の役宅を廃して防火帯とした。
代替の宅居は御下屋敷東側の御添地を開発して充当した。

2-7. 文政七年(1824)頃

参照した地図は名古屋市博物館蔵「名古屋城下図
文政十一年写」を用いている。

◇ 松廣町

「禅寺町の南より宮出町へ出る横筋なり。文化五年
(1808)新道をひらき松徳院と廣徳寺の地子なるゆ
ゑ松廣町と呼べり。【金鱗九十九塵】」

◇ 善昌寺門前

「善昌寺門前は文政六年(1823)町家とせり。」
※善昌寺は天保三年(1832)に改号しているので、門
前が町家となった時点では瑞雲寺である。

◆ 慶雲軒 曹洞宗

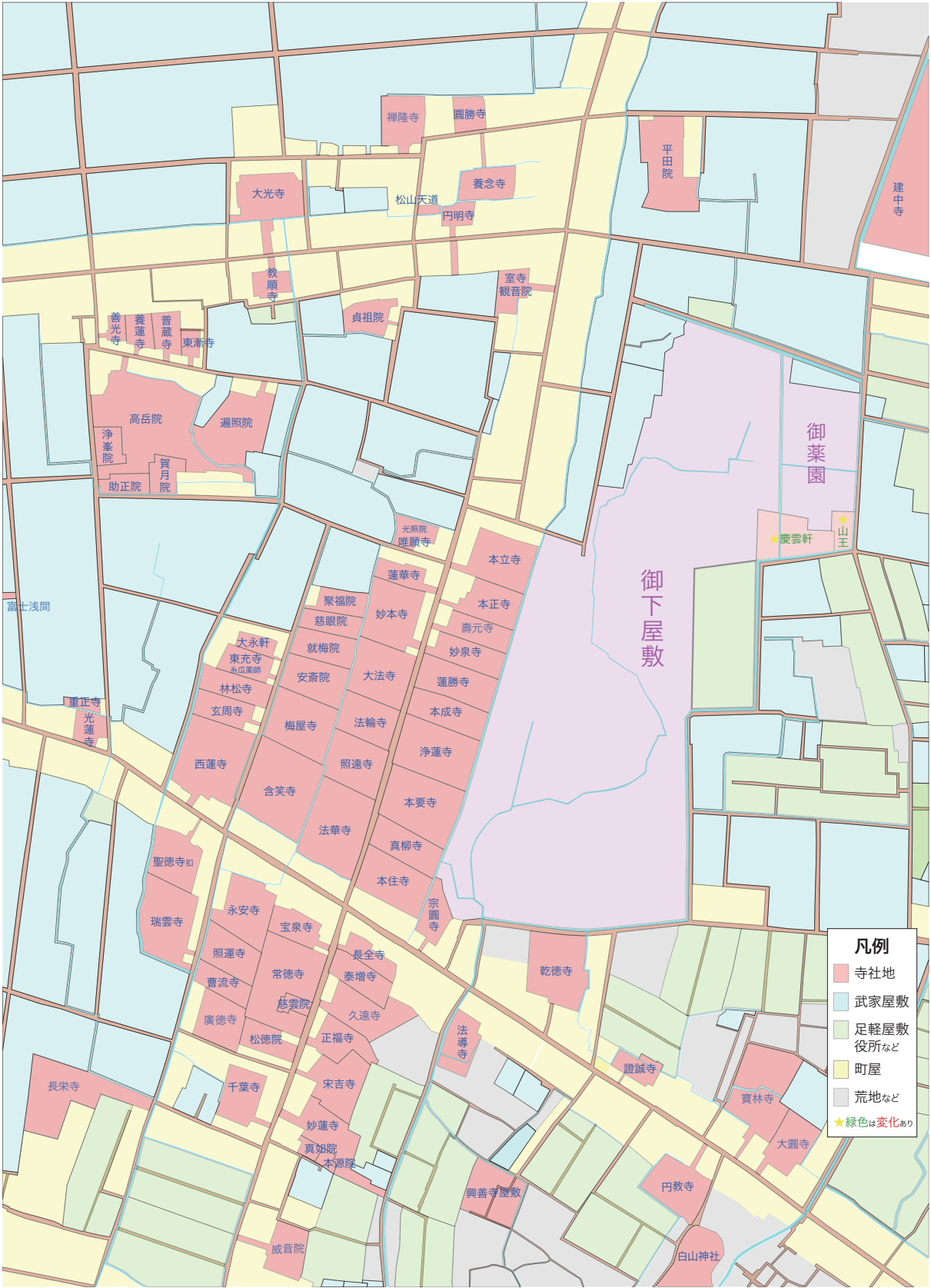
「当精舎ハ、御下屋敷御構内にして、文政年中御小
納戸御支配にて、一字御創建あり。則御本社は章
公の御霊を寄りて、孚式権現と奉称しと云々【金
鱗九十九塵】」

◆ 山王社 護国院末堂

文政年中勧請【典拠不明】

文政七年(1824)頃の東寺町周辺寺社配置図

寺社の安定期



この図の道路や寺社・屋敷配置等は、名古屋市博物館蔵「名古屋城下図 文政十一年写」571-108を参照して作図した。

2-8. 明治三年(1870)頃

この図の道路や寺社・屋敷配置等は、鶴舞中央図書館蔵「尾府全図 明治三年稿」を参考に作図した。

この絵図を描いた高力全休庵は、尾張藩のみならず全国でも有名な「猿猴庵」の息子である。幕末期の城下図はそこそこ多いが、主なものはこの全休庵図を本歌とする写ということになる。

かつてこの地図をデジタル化する時、校合・補填のために目にした絵図で役宅の変遷の多さに困惑したことを思い出す。わずか1～2年の変化であるが、明治五年の最晩年の作製は断念せざるをえなかった。

その変遷の理由は、廃藩置県にともなう尾張藩の廃止とそれに先立つ藩政の混乱で、江戸住まいの定番・定府の藩士が一時的に名古屋城下に集められたことにある。さらに青松葉事件などに関わる人物の屋敷が揚地となり、他人の屋敷や新規雇い藩士の仮の宿となっていたこともある。

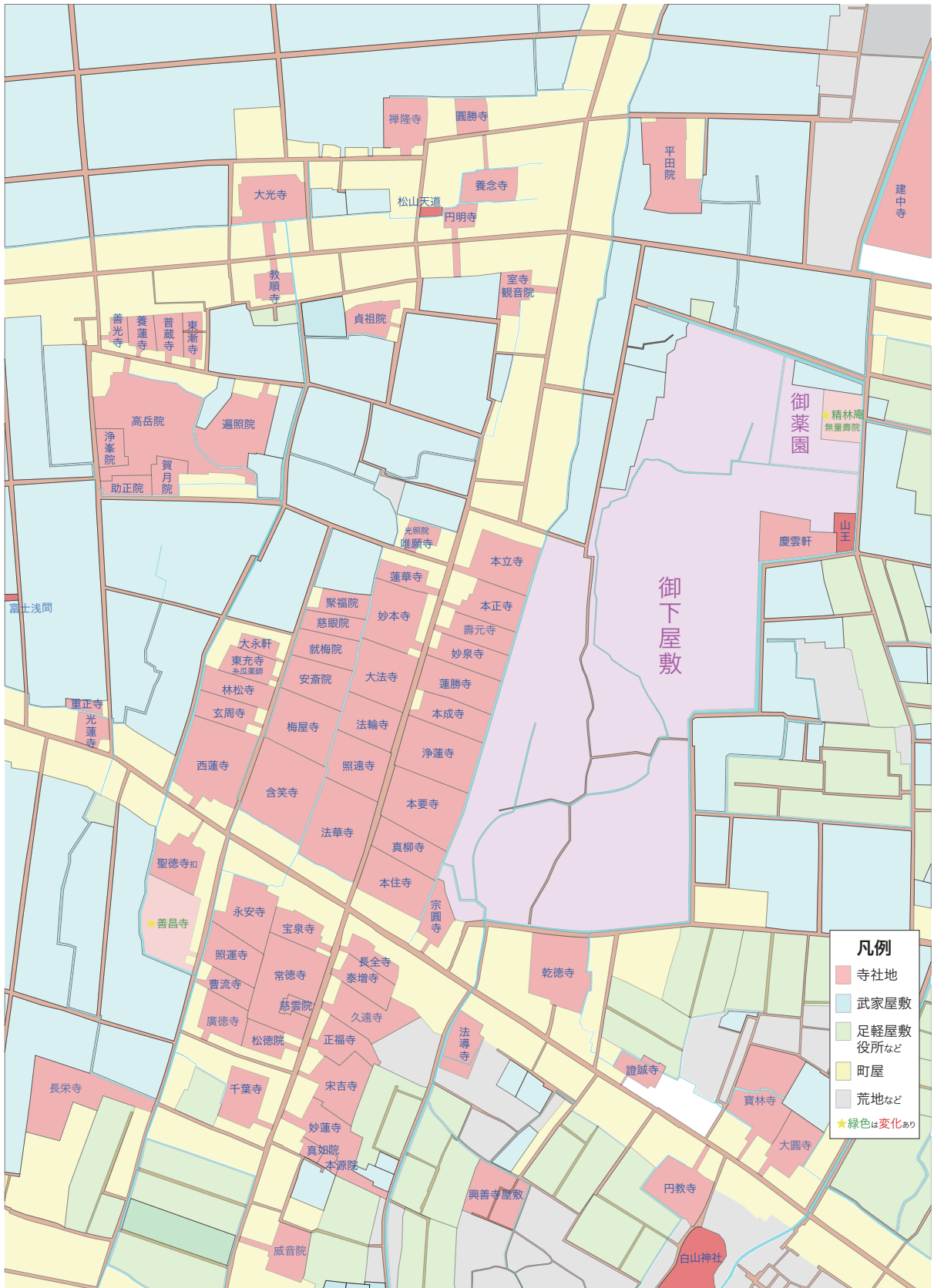
◆ 瑞雲寺 >> 善昌寺 臨済宗妙心寺派 政秀寺末
「天保三年(1832)、今の名に改む」

◆ 精林庵 浄土宗鎮西派 建中寺末
「安政三年(1856)十二月、藩主宗春菩提の為に今の地に移し、万延元年(1860)八月、今の寺号に改む」

◇ 本成寺門前
「本成寺門前は文政十年(1827)、町家とせり」

明治三年(1870)頃の東寺町周辺寺社配置図

幕末最晩期



この図の道路や寺社・屋敷配置等は、鶴舞中央図書館蔵「尾府全図 明治三年稿」0A2-64 を参照して作図した。

2-9. 明治二十年(1887)頃

参照した地図は、名古屋市市政資料館蔵「愛知県名古屋区市街地籍全図」である。この地籍図は明治十八年頃に作製されたもので、旧城下町の域内分しか存在しない。地籍という利権関係のからむ地図ゆえに、正確な測量図が求められ、また区長以下組長にいたるまで、この内容でまちがいはないと印までついているものである。

この「地籍全図」は名古屋市土木局から 1986 年に復刻刊行され、多くの研究者の利用に供されることとなった。ただ現物は 3 幅の巨大な絵図で、一辺 5 m ほどもある。そこで復刻版はそれぞれを 20 ～30 幅ほどに切り分け、「天・地・人」として刊行された。主な図書館では閲覧できるはずである。

この地図は単に明治二十年頃の正確な地図という以上の意味を持っている。というのも、いま国土地理院の「数値地図」などは無料で利用でき、加工して配付することも可能である。この現代の「数値地図」の上に「地籍全図」を載せると、ほぼ昔の町割りが浮かび上がってくる。つまり拡張はされ、多少直線化されていても当時の道の姿は生きているのである。

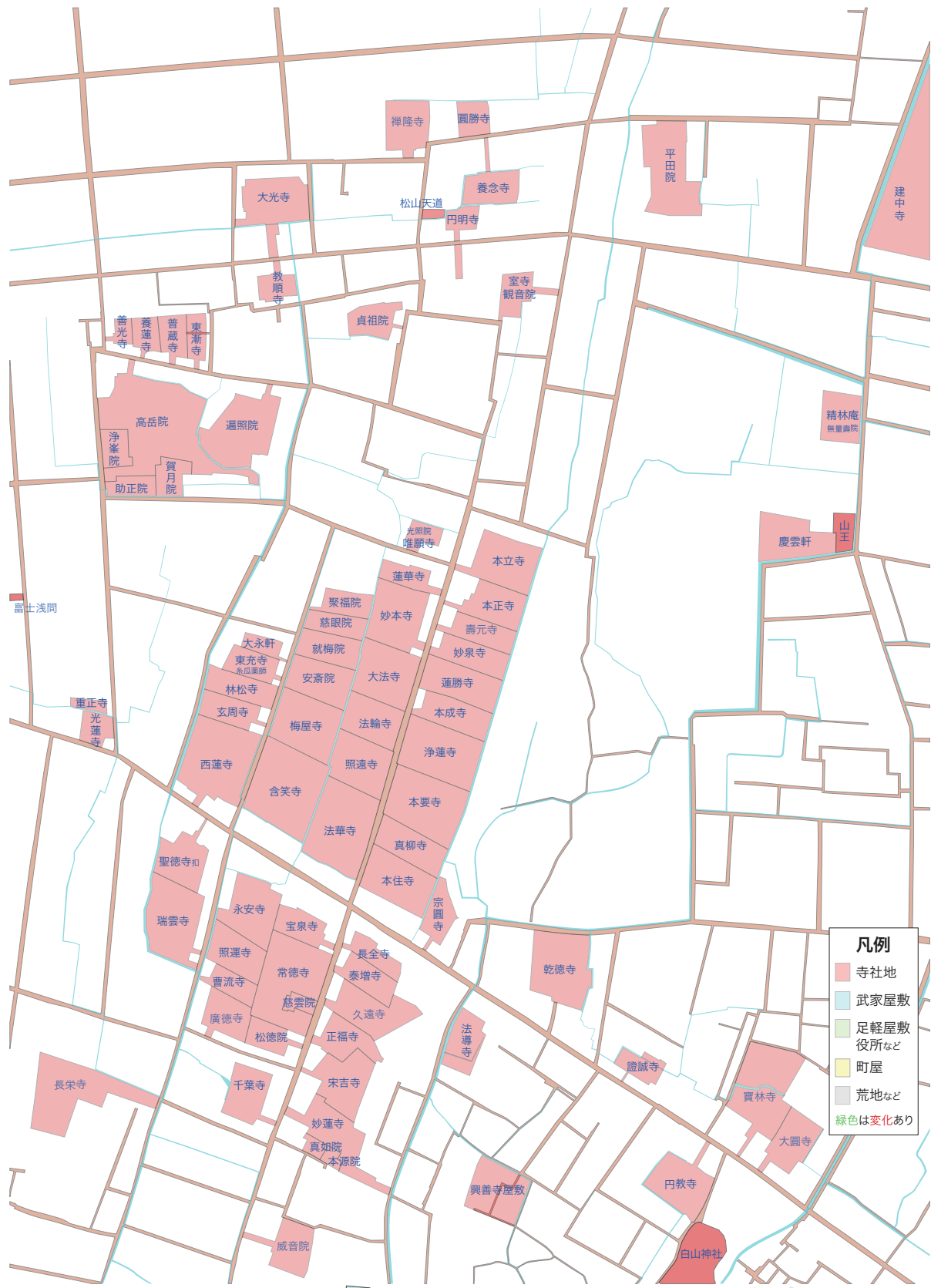
明治二十年頃はまだ江戸の町割りがそのままに残されていて、それは現代図とは重ね合わせることができない江戸時代の城下絵図とを結びつける重要な地図なのである。2つの事柄がその間をうめる新たな発見によって、その連続性が確認されることがある。これをミッシング・リンクの発見というが、まさにこの地籍図はそれに当たる。

いかに正確な現代図が存在しても、城下図が存在しない正保四年(1647)以前の様相は判明しない。しかし武家地や社寺地の状況は当初から変わっていないため再現できるのである。この9葉の地図によって、一目で寺の変遷の様子のみならず、新道や町人地が開発されていく様子なども逐一確認することができる。

実はこの基本要件は平成18年度に文化庁の補助金を得て作製した成果がベースとなっている。刊行した「名古屋城下町復元プロジェクト報告書」(名古屋城下町調査実行委員会編・事務局：名古屋市博物館)は、主要図書館には配付したのでご利用されるとよいだろう。

明治二十年(1887)頃の東寺町周辺寺社配置図

初の近代測量地図



この図の道路や寺社・屋敷配置等は、「愛知県名古屋区市街地籍全図 明治十八年頃作製」を参照して作図した。

Ⅲ. 東寺町から移転した寺院

清須越で東寺町とその周辺に移った寺院の大半はその地で幕末維新をむかえた。明治五年の神仏分離令と廃仏毀釈運動の荒波に多くの寺院が廃寺を余儀なくされたが、名古屋ではこの影響は限定的で、ほとんどの寺院が生き残ることができた。この時廃寺となったのは修験系の寺院のみで、寺社は分離されたものの、どちらか、あるいは両者共に存続し続けた事例も多い。とはいえ多くの寺院は藩や藩主からの庇護が途絶え経済的な危機をむかえた。藩士を門信徒とする多くの寺院も同様の危機に見舞われた。こうした寺院の末寺、塔頭のなかには、経済的な理由から親寺を離れて独立したり、廃絶に追い込まれるところも少なくなかった。東寺町に多い日蓮宗や、在家宗派である真宗では、多くの町人層を檀徒に抱えていたため、比較的影響が薄かったといえよう。

こうして新たな時代を迎えた寺院だが、太平洋戦争の空襲による堂宇の焼失や、戦災復興の都市計画により、清須越から330年間、連綿と続いてきた往時の姿を一変させることとなった。

いま“東寺町”の地を離れたとはいえ、かつてこの地で歴史を紡いできた寺院の履歴を無視しては片手落ちだろう。いまだ調査の端緒についたばかりであるが、1項を設けて簡潔に紹介する。



本立寺 日蓮宗

戦災で山門以外すべて焼失。
昭和25年頃、寺域が完全に桜通の計画に入り移転。山門のみ移築。
昭和区白金 3-9-15



妙泉寺 日蓮宗

寿元寺と同様戦災で焼失し、戦後の復興計画で移転。かつての配置通り、寿元寺と並んで移転している。
東区東桜 2-16-43



寿元寺 日蓮宗

本堂は戦災で焼失し、寺地は戦後の復興計画で道路用地にかけ移転。東寺町の含笑寺、法華寺の旧墓域内で、区画整理事業の事業用地を購入して妙泉寺とともに移転した。

東区東桜 2-16-46



蓮勝寺 日蓮宗

元和四年、森住院日勝の開基とされる。したがって狭義の“清須越”の寺ではない。現在の芸創センターが墓地、道を挟んで寺域があった。昭和20年の空襲で山門を残して全焼。その後平和公園近くに土地を求め、まず山門のみ移築し、バラックの本堂へ通っていたという。昭和24年頃に完全移転。

千種区池上町 2-39



蓮華寺 日蓮宗

昭和19年の空襲で山門以外は全焼。その後は他のお寺の本堂を借用していたが、昭和36年に移転。現在の本堂は大須首題寺の本堂（その前身は日進の妙見堂）を譲り受けたもの。

千種区井上町 16



妙蓮寺 日蓮宗

法住山顕性寺と兼帯。

中区松原 1-16-12



聚福院 曹洞宗

昭和 42 年移転。
長久手町長鍬東塚田



就梅院 曹洞宗

昭和 40 年頃移転。
千種区東山元町 5-18



広徳寺 曹洞宗

尾張旭市庄南町 4-78-1



松徳院 曹洞宗

北区東味鏡 2-2404



泰増寺 曹洞宗

戦災では山門と本尊を除いて全焼。
昭和 45 年に移転。
天白区大字平針字黒石 2878-1548



長全寺 曹洞宗

戦災で全焼。仮小屋で再興したが、都市計画の道路拡張により昭和 32 年 7 月上飯田東に移転、本堂落慶。
北区上飯田東 5-39



普蔵寺 曹洞宗

戦災に遭い、ほぼ焼失。東区七小町にて仮本堂で継続。昭和 48 年に移転。
昭和区高峯町 48



養蓮寺 浄土宗

戦災で本尊・過去帳以外は焼失。戦後は七小町で仮堂を建てていたが、程なく移転。
千種区池上町 2-10



善光寺 浄土宗

七小町で戦災に遭い全焼。昭和 27-8 年に、今の寺地の廃寺(護念寺)に移り再興。
東区筒井 1-14-30



常德寺 もと顕本法華宗

現在は常楽寺と改号。日蓮宗に改宗。
千種区城山 2-47



東漸寺 浄土真宗本願寺派

明治 14 年に移転許可を得て、18 年本堂建立。
以後この地で営まれている。
春日井市知多町 4-66



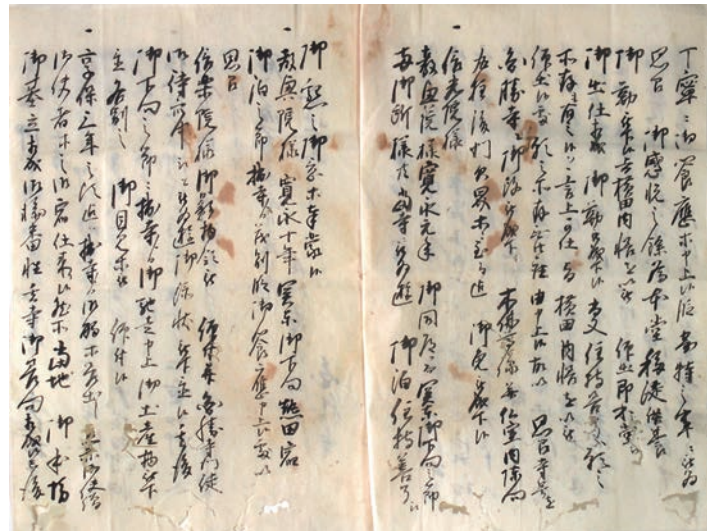
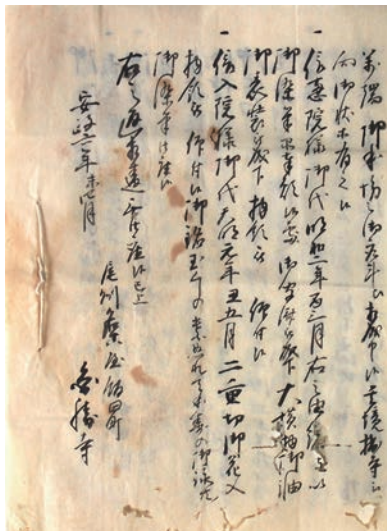
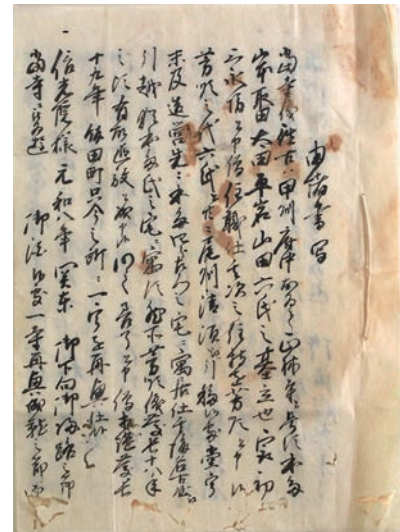
平田院 浄土宗

かろうじて戦災を免れたが、都市化の波に押され、平成 2 年に移転。
天白区鴻の巣 1-1015

IV. 今年度調査の概要と調査報告

1. 圓勝寺調査の成果

『張州府志』の圓勝寺の項には「在飯田陌、一向宗西派直参、元在甲州府中、善了坊建之、年紀不詳、慶長十六辛亥年移于今地」と記されている。その詳細については手がかりがなかったが、名古屋文化遺産活用実行委員会の東寺町文化財ツアーがきっかけとなり、戦時中に疎開し空襲を免れた本尊や什宝を調査する機会を得た。細かな調査分析はまだ途についたばかりであるが、発見された由緒書から、名古屋城下町成立に新たな視点が生まれる可能性が出てきた。



圓勝寺由緒書 安政6年(1859)

一 信光院様(准如)・教興院様(良如)、寛永元年、御同道
二而、関東御下向之節、両御所様共当寺二被為遊御
泊、住持善了江御懇之御意等奉蒙候。
一 教興院様(良如)、寛永十年、関東御下向、熱田宿御泊
之節、拙寺より茂別段御饗応申上候処、以思召、信
樂院様(顯如)御影拝領被仰付、并圓勝寺門徒御侍衆
中江と、被為遊御添状、被下置候、其後御下向之節
二拙寺より御馳走申上、御土産物被下置、各別之御
目見等被仰付候。
一 享保三年之頃迄ハ、拙寺より御触等差出し、且亦
御使僧御使者等之御宿仕来り候。然所、当地御本
坊御基立相成、御輪番性玄寺御差向相成候、已後
万端、御本坊之御取斗ひ相成申候。其境拙寺江向
御状等有之候。
一 信惠院様(法如)御代、明和二年酉三月、右之由緒を以、
御染筆品奉願候処、御聞濟被成下、大横物御軸御
表装被成下、拝領被仰付候。
一 信入院様(文如)御代、天明元年丑五月、二重切御花入
拝領被仰付候。御銘玉くしの葉ぬれてほすの御詠
共御染筆御座候。
右之通、相違無御座候。已上。
安政六年未四月
尾州名古屋飯田町
圓勝寺

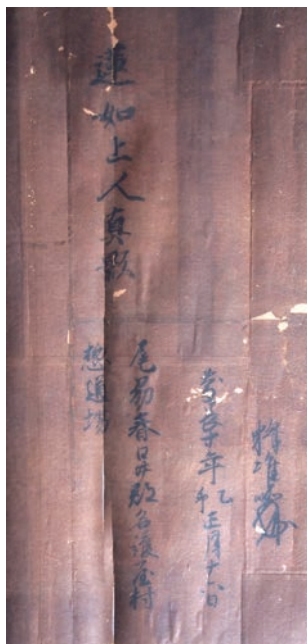
【准如裏書】

釈准如（花押）

慶長廿年乙卯三月十六日

蓮如上人真影

尾州春日井郡名護屋村
惣道場



蓮如上人真影

慶長20年(1615) 上部の賛は准如筆。

樹心弘誓仏地 流念難思法海

深知如来衿哀 良仰師教恩厚

裏書にある惣道場とは、数名以上の他姓の者が創建・
護持する形を意味するので、本多・山本はじめ六家
で創建したとする由緒書に合致している。



【圓勝寺由緒書全文】

由緒書写

当寺儀、往古ハ甲州府中おゐて正林寺と号す。本
多・山本・取田・太田・平岩・山田六氏の基立也。
最初三永坊と申僧住職仕、其次之住持を芳順と申
候。

芳順之代、六氏と共に尾州清須江引移候処、堂宇
未及造営、先々本多四郎左衛門之宅ニ寓居仕、其
後名古屋江引越、猶本多氏之宅ニ寓ス。然所芳順儀、
慶長十八年之頃、有故追放と成申候。仍之、善了
と申僧相繼、慶長十九年、飯田町只今之所ニ一字
を再興仕候。

一信光院様(准如)、元和八年、関東御下向御帰路之節、
当寺ニ被為遊御泊候処、一寺再興成就之節ニ而、丁
寧ニ御饗応等申上候段、奇特之輩ニ被為思召、御感
悦之余、為本堂移徙供養御勤被下候旨、横田内膳を
以被仰出、即本堂江御出仕相成、御勤被成下候、尚
又住持善了へ願之所存も有之候ハ、言上可仕旨、
横田内膳を以被仰出候処、願之所存無御座由、申上
候故、以思召、寺号を圓勝寺ニ御改被成下、木仏尊
像、并仏室内陣向丸柱、後門、欠界等ニ至る迄、御免
被成下候。



六字名号 蓮如筆



本尊 阿弥陀仏立像



一札之事

延享3年(1746)に圓勝寺が本山に提出した誓約書であるが、現在は圓勝寺に戻されている。

一札之事

一御当家御代々御厚恩不浅就被思召候、御公義輕存間敷旨、今度從御本寺被仰付、御尤至極奉存候、其趣門徒中迄堅相守候様可申付事、

一対御公義不義之輩御座候而、如何様二頼申候共、雖為門徒入魂之仁、一味仕間敷候、其旨有之候御本寺江言上可仕事、

一惣而御本寺之御下知・法式堅相守、寺役無懈怠、門葉勸化之儀疎略仕間敷事、

右条目於違犯者、忽洩如来之本願、別而者蒙祖師之冥罰、永可墜地獄者也、仍誓詞如件、

尾張国愛知郡名護屋飯田町

延享三丙寅年五月九日 圓勝寺(印)

雲楷(花押)

下間少進殿

下間宮内卿殿

下間兵部卿殿

上田主殿殿



親鸞聖人絵伝 四幅対のうち第四福

【箱書】

尾張国愛知郡名護屋村飯田町

御絵伝

圓勝寺素秀

享保十七壬子年十二月十九日 取次主膳



【裏書】

釈住如(花押)

享保十七壬子年臘月下旬

大谷本願寺親鸞聖人之縁起

願主 釈素秀

○住如は西本願寺十五代門主。

2. 調査概要

① 圓勝寺由緒書きの要点

- 甲州府中に在り、天台宗の正林寺と号していた。開基は②にあげた六氏。
- 初世は三永坊。二世芳順の代に六氏とともに清須に移徙。
- 清須では本多四郎左衛門宅に寓居していた。
- 名古屋へ移徙の後、芳順を追放。三世善了をもって開山。真宗への宗派替えはこの時点か。
- 元和八年(1622)、准如上人が圓勝寺と改名する。

別の史料にみる円勝寺の記述

「二世芳順の時、清須へ易地。正林寺と改。其後遷府の砌、當地へ易地」
「当寺元は撞木町服部仁左衛門屋敷に在り。天野清左衛門居宅の寺屋に易地、建創す」
『蓬州旧勝録』『慶長十六年辛亥遷于今地』『府城志』

② 開基六氏の履歴

本多家：駿河詰衆 慶長十七年に駿府で近侍。

山本家：御部屋後附衆 義直が甲府襲封し、平岩親吉が代官として甲府統治の時、召出される。

『士林浜廻』の 山本惣兵衛の記述には、

「平岩親吉後室休清院養之為子【藩士大全 309-142】」とあり、また

同様にの平岩親吉の履歴の最後には、

「親吉卒後 敬公食録五万石賜其ノ妻ニ、令居于名城ノ郭内ニ時ニ称後室ト、
養テ山本庄兵衛ヲ為子、後半左衛門【藩士大全 307-082】」とある。
親吉の死後、その妻が山本惣兵衛（庄兵衛は誤りか）を養い育てたことがわかる。
この山本家が六氏のなかでも別格の存在と思われる

取田家：弓削衆 もと平岩親吉の家臣

太田家：弓削衆 もと平岩親吉の家臣

平岩家：弓削衆 もと平岩親吉の一族・従士

山田家：『士林浜廻』に不見。駿河詰衆で初期に絶家か？

「今年【慶長 17】主計頭近士役人等駿府へ相詰 公之御用相達

清洲衆ヨリも被撰出駿府に相詰云々 主計頭家来ヨリ被召出輩 << 中略 >>

同断（主計頭小姓死後被召出）同苗久太夫子 山田小十郎 << 後金左衛門 絶 >>

右五人御小性に被召出【編年大略 - 元】」

以上圓勝寺開基に関わる六家は尾張藩士としての履歴が古く、因縁も深い家系である。

すべての家が一旦平岩親吉の家臣となり、義直の家臣に転じている。

慶長六～慶長八年頃に甲府で自分たちの寺を建立したという記述は信憑性が高いといえよう。

③ 圓勝寺の「清須越」

清須越の時期は諸説あるが、慶長 18 年の初頭をピークとする前後の時期とされる。

「十八年 月 諸士及市人の宅地を配符せられ、清須町奉行松井勘兵衛、舎人源太左衛門を以、
名古屋町奉行とす。【尾藩世紀】」

「慶長十八丑年 名古屋越諸士町人住居相定、松井勘兵衛、舎人源太左衛門、忠吉卿清須御在
城之節町奉行相勤罷在、義直卿へ奉仕 已後職如元 年月不相分」【御日記頭書 p005】

「今年 名古屋越諸士町人住居定云々 去年迄は清須・名護屋懸持 或諸士御城下近郷知行所に
僑居 至今年安堵云々【編年大略 - 元】」

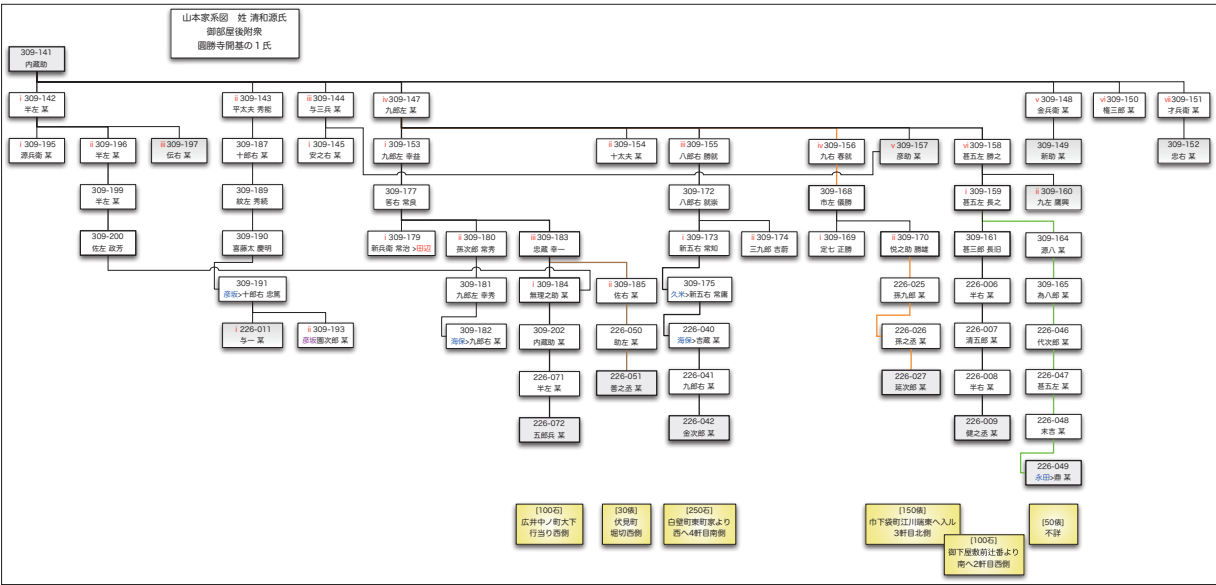
一方“公式”、の移転計画とは別に移った寺院がある。その寺院は次のような特徴をもつ。

- i 慶長18年以前にこの地に移ったとの記録(伝承)をもつ。
- ii プレ尾張藩主ともいべき松平忠吉(性高院)&仙千代(高岳院)との関連が深い。
- iii 当時の実質的な統治者である平岩親吉との関連が深い。

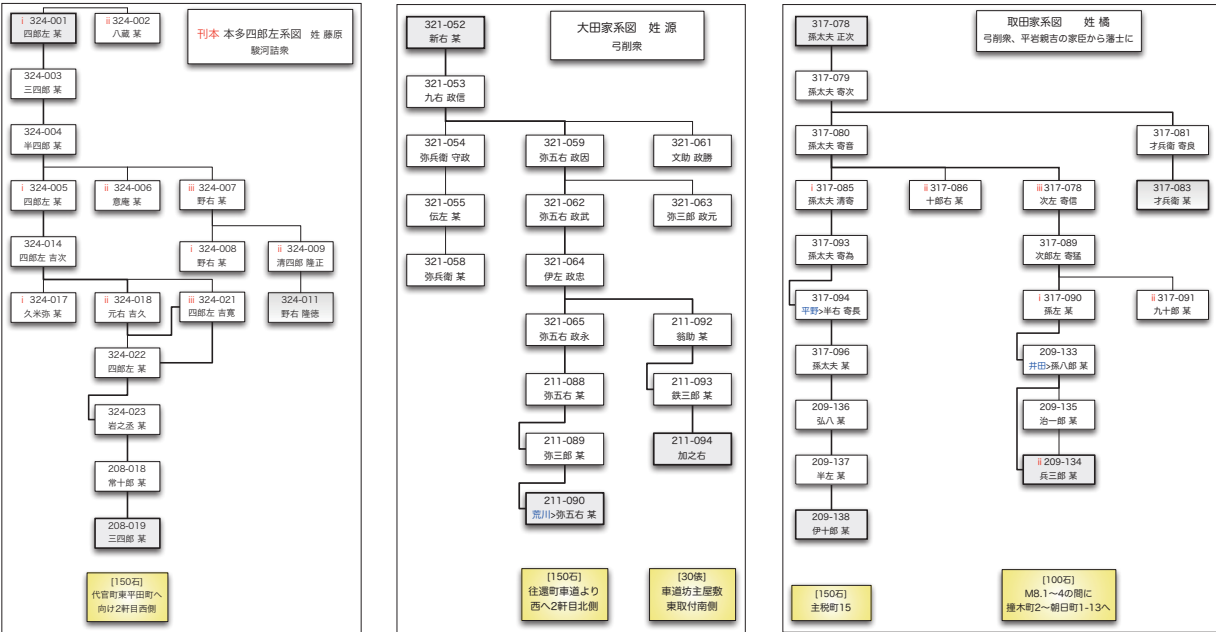
圓勝寺史料や開基に関わった有力檀家の家系図から見えてくるものは、平岩親吉との関係性のなかで行われた“もうひとつの清須越”の様相といえよう。

山本家系図

圓勝寺の開基に関わる六氏の中でも、特別な家柄とおもわれる山本家の系図をしめす。少なくとも六家の分家が明治維新まで家をつないでいたことが判明した。



以下、本多、太田、取田家の系図をしめす。



清須越前後の尾張藩関連年表

[illegible]

V. 圓勝寺調査からみえる “もうひとつの清須越、

今回の圓勝寺調査を通して、あくまで仮説ではあるが、東寺町北部に所在する一部の寺院に “もうひとつの清須越、” があったと提唱したい。というのも、尾張藩という “公、” が主導する清須越に対し、同じ時期、圓勝寺など一部の寺院が、独自で名古屋に移っていることが浮かび上がってきた。清須越が落ち着き城下が安定した後ならば、寺は土地を購って移転することもできる。たとえば、元和七年(1621)に町人地である鍋屋町に移徙した円明寺や、寛永十九年(1642)の法導寺、慶安二年(1649)の光蓮寺などは、こうして移転してきた寺院である。しかし、町造り計画が着工したばかりの時点である。かの万松寺のような大有力寺院でさえ移転を強いられるような情勢のなかでは、希望通りの移転などは無かったに等しいだろう。この時期にそれが可能だったのは、権力の中核と縁の深い寺院だったと考えられる。その権力中核の人物こそ、当時名古屋の実質的な統治者であった平岩親吉である。

ここで “もうひとつの清須越、” で移転したと想定される寺院を紹介しよう。

慶長十六年に名古屋に移った高岳院は、家康の八男である仙千代の菩提寺である。仙千代は平岩親吉の養嗣子となっていたが、慶長五年に六才で没している。高岳院は嗣子の菩提寺ゆえに別格としても、なぜ寺町に移転先を求めなかったのだろうか。南寺町の性高院は家康の四男である松平忠吉が母のために再興した寺だが、慶長十二年、忠吉が亡くなると菩提寺のひとつとされた。性高院の名古屋移転は慶長十五年で、若宮神社の南側に寺域を得ている。この両者の違いはどこにあるのだろうか。

大光寺はどうであろうか。大光寺は甲斐の十八家の創建とされ、親吉と共に厩橋、甲斐府中、清須へと移転し、慶長十五年に現在地へ移徙している。やはり甲斐からの移転組で、親吉とはきわめて近い寺院といえよう。同様に教順寺も厩橋で建立され、甲斐府中から清須に移り、元和初年に名古屋片端筋の坂下に移ったものの、寛永九年(1632)に現在地に再移転している。甲州グループにして “清須越最晩年、” の寺だ。

貞祖院も特異性が際立つ寺院である。清須で松平忠吉とその乳母押賀茂の位牌所として建立され、慶長十六年にこの地に移転した。その土地は門前で行き止まる道の奥にある。計画途中の道が開ける前の保留地を得たという状況だろうか。だれがその認可を与えたのか。

平岩親吉自身が三州で建立したのが平田院である。親吉に帯同し甲府へ移るものの、親吉が清須に冊封されると、先行して名古屋片端鍛冶屋町に移り、慶長十八年に現在地に三遷した。つまり、名古屋開府に先行して名古屋の一等地に移ったものの、親吉の没後は重臣屋敷地から追い出されるように町域外に移転したことになる。

さて、これらの寺院の履歴から何が読み取れるのであろうか。平岩親吉は慶長十六年末にほぼ完成した名古屋城内で没したが、清須にあって名古屋城築城と城下町建設の最高責任者であった。南寺町や東寺町の寺は、だれが選別したのか明らかではないものの、こうした “公、” の計画とは別の “縁故の移転、” は平岩親吉の決断で行われたことが推測される。さらに親吉の逝去後、彼の家臣団が解体される過程で、親吉の側近たちが排除されるのと軌を一にして、これらの寺も冷遇されていくようにもみえる。今後上述の各寺院の調査をすすめてこの推論を裏付けることが残されているが、 “もうひとつの清須越、” という目線でこの地に移転した寺院群を再検討する必要があるのではなかろうか。

東寺町の成立と変遷

編 集 名古屋市蓬左文庫

〒461-0023 名古屋市東区徳川町 1001 番地

電話 (052)935-2173 FAX (052)935-9174

発 行 名古屋文化遺産活用実行委員会

発行日 平成 29 年 3 月 15 日

本書は文化庁「平成 28 年度文化遺産を活かした地域活性化事業」により作成し、
松村冬樹・鳥居和之が執筆した。



名古屋市蓬左文庫蔵「尾府名古屋図」図 1056